

教育学部非常勤講師

とくながまさなお

徳永正直 先生

今回のテーマはずばり、“教育”です。数多くの新しいタイプの難題を抱えて迷走する日本社会、先行き不透明で誰もが不安を煽られる厳しい時代——教育学の視点から、この複雑を極めた現代社会に鋭いメスが入りました。
(あけち小三郎)

ACADE見IC No.138



☆☆☆プロフィール☆☆☆

とくながまさなおと申します！ 京都大学の卒業生で、今は大阪樟蔭女子大学人間科学部で専任教授として勤めています。4年前から京大でも非常勤講師として教職科目「道徳教育論」を担当しています。専門はドイツ教育学。大学院博士課程中には、頼まれて高校で教鞭をとったこともありました。でも家庭ではごくふつうの父親なんですよ。あと、大阪樟蔭女子大ではスキー部の指導者という顔も持っています。

起こす現実目の前にあるんだから、その場その場で対処しなければとおっしゃる方がいますが、どうなのでしょう。例えば体罰問題を考えると、子どもの問題が多様化し、従来のやり方では対応しきれなくなっているから、法律で禁じられているはずの“体罰”に訴えてしまうわけです。体罰は力で子どもをねじ伏せるわけですから、本来の対処法としてはどこかおかしいはずなんです。問題を放っておかずきちんと解決することはもちろん必要ですけど、肝心なのはそのやり方で、そこにどこまで子ども自身の声が反映されているかということです。教育現場には教育者自身の倫理観や価値観が強烈に反映されますから、子どもを援助する際には、どこまでも子ども自身の選択の自由を尊重するのが本質です。しかし、実際には子どもの声が届いていないのが現実のように思われます。

Q: 近年の教育事情をご覧になって、お気づきになったことはありますか？

私の小5の息子の学級で起こった事件についてお話しします。ある子が他の子を殴って怪我をさせ、殴られた子は登校拒否になりました。現場の先生たちは大慌てで対応に追われ、私もこのような仕事をしているものから、事態の解決にと引張り出されました。しかし、現場の先生たちの対処の仕方を見てみるとその機械的なこと…これでは被害者、加害者いずれの子にも納得してもらえない。私は彼らに本気で怒りました、「暴力を振るった子の親に、子どもと一緒に被害者の前で頭を下げさせなさい！」先生たちの尽力で謝罪は実現しました。それ以後、被害者も少しずつ学校へ行くかなという様子を見せていますし、何より先生たちが、事件を通して成長できた

ようでした。子どもは、大人が毅然として「これは決してやってはいけないことだよ」と教えてあげないと善悪の判断がつかない。もちろん、力に訴えてはいけませんが、問題を起こした子ども自身、誰かが本気で叱ってくれるのを待っているのです。最近の先生たちは「優しい」と言われますが、子どもの何もかもを「いいよ」と容認することが真の優しさじゃない。子どもにきちんとけじめをつけさせる“厳しさ”も必要です。例の先生たちはその後幾分“厳しく”なりました。でも子どもの側はそれで先生を嫌いになったわけではなく、むしろみんな「卒業まで先生と一緒に頑張りたい」と言っているそうですよ。

このように、教師も力をつけていくわけです。指導力不足とのレッテルをひとたび貼られた問題教師は校長の権限で担任から即下ろされる風潮がありますが…問題教師を排除したからといって、何の問題解決にもならない。このように、教育の自律を妨げる動きが強まっていることに、強い危機感を覚えます。

Q: 将来、教育に携わる職業に就く人でなくても、教育に関心を持つべきでしょうか？

当然そうあるべきだと思います。自分の目の前に問題を抱え苦しんでいる人が現われたとき、どのようにアドバイスをし、ケアをしてあげるか…こういうことは日常的に起こりうる問題ですよ。広い意味での「教育」という観点に立てば、教育は必ずしも学校や家庭というさやに納まるものではないし、人間と人間の対話ということを考えるとき、究極にはやっぱり教育の問題に立ち返るような気がします。

また、教育を考えることは身近な人権の問題を考えることにもなります。教育は、教育基本法第1条の「真理と正義を愛し、個人の価値を尊び平和の創造に貢献できる、自主的精神に充ちた人格の完成」を目指すものです。ところが、昨年中学校の道徳教材として全国一斉に導入された「心のノート」や、教育基本法改正論議の狙いは「愛国心」なんですよ。牛肉の偽装事件をはじめ、人心の腐敗が象徴されているような事件が数多く起きている日本。こんな国を愛し国家のために尽くせ、というのは無理な話ですよ。同じ「国を愛する」行為でも国民一人ひとり、様々な理由があつていい。憲法は「思想・良心の自由」を保障していますが、愛国心という美名のもとに行われる教育はこれを侵し、実際には子ども一人ひとりの思考方法や感性ま



はみだしすてーじ 最近忙しくて投稿を2回もさぼってしまった…。(葉・3 大食漢?) ⇒う〜ん、抜けがないよう最善の努力をしてきたつもりだったが、我々の手落ちだった。二度とこのようなことを起こさせないよう、監視システムを強化するつもりである。

でも統制し歪めてしまっているのではないかな。こういったことを、広い視野を持って考えてほしいと思います。

Q: これから将来の社会を担ってゆく京大生は、どのような能力を培ってゆくべきでしょうか？

京大生は学力が落ちてきた、と言われますが、僕は決してそうは思いません。講義中私語がなく、要点をノートに実に無駄なくまとめていく。知的能力の高さはさすが京大生ですね。その一方で、それらの学問的問題を、単なる知識ではなく改めて自分自身の問題として認識し、ひたむきに考え取り組む姿勢が貧弱になってきたという嘆きがあります。テストの答案も、先生が授業で話したことの要点をうまくまとめているんですが、それ以上のもの、すなわち独創性がない。インターネットの普及で情報が簡単に手に入るようになったのが大きな要因なのでしょうが、もっと泥んこになって何かをする情熱が欲しい。たとえば、学級崩壊の話が授業で聞いたなら、自ら現場に足を運び、その光景を観察して「どうすればよいのだろう」と考えてみるとかね。これぐらいの意気込みというか、泥臭さ。そういう姿勢から「批判精神」が生まれてきます。

批判精神がないと、権威ある者から言われたことを「あのお方が重要だと言ってるんだからそうなんだ」と簡単に信じこまされる。自分自身本当に理解し納得した上で重要だと思ったのならいいんですが。そうした「偽りの権威」を見抜く力、騙されない力を養ってください。自分が正しいと考えることは貫き通し、自分のとる行動には責任を持つことこそが自律なのです。ただ、この姿勢を貫くと、会社というところに入れば苦しむでしょうね。会社では利潤の追求が全てで、個人の声が反映されないから。でも、そこで苦しむことを受け入れ、乗り越える強さが欲しい。「共同体自身も各人の要求に応えるように変わっていかないと。この俺が共同体を変えてやる」ぐらいの気概を持ってほしい。



あなたにとっての正義が、本当に皆にとって正義ですか？

ただし、同時に自分が正義だと思って決断したことが本当に他人にとっても正義なのかを考えることは必要です。小泉首相は靖国問題で、参拝決行を正義だとして強硬に押し通しました。日本は過去の戦争に対する責任があるのだから、本来戦争を批判するリーダー国であるべきなのです。首相も他者や他国の意見を聞き入れ、もう少し勉強するべきだった。自分では他人の気持ちをよく考えているつもりでも、それはやはり己から他を見た眼にすぎない。独善的になることなく他者からの眼を受け入れて、批判的に自己反省をする力。自分で自分を批判するのです。そこまでして初めて批判精神と言えるのだと思います。
——ありがとうございました。

<批判的 自己反省の必要性>

はみだしすてーじ 「私はQちゃん！」と思いながら鴨川を走っている人って、私以外に何人いるのでしょうか？ (文・他 RATS&CATS) ⇒Qちゃんが鴨川を走っているのを見たことがある人っているだろうか？ (鴨川ではないが家の近所を「私はQちゃん！」と思って走ることがある編)